

平成21年2月3日

## 平成20年度全校朝礼（2月）用講話

～実物に触れることとは、真実のメッセージを全身で受け止めること～

皆さん、お早うございます。今月5日から、中学校3年生はスキー研修ですね。待ち遠しいですね。

さて、本校には体育祭や文化祭、近大公開授業やキャンパス体験ツアー、事業所体験学習や研修旅行など、さまざまな実体験の場があります。

インターネットやパンフレットで知りたい情報は概ね手にはいるのに、わざわざ現地まで出かけて体験を積んだり、大学の先生を招いて大学の講義を直接聴講したりすることには、どのような意味があるのでしょうか。

今日は、動物園での私の体験をもとに、常識や知識は一度は疑うことが肝心であること、質の高い直接体験とは、真実のメッセージを全身で受け止めることである、という話をしたいと思います。

（1）鶏のトサカに触った男子中学生が、「あっ！」と叫んで手をひっこめました。鶏のトサカの暖かさに驚いたようです。そばにいた飼育担当者が、「えっ、君、鶏って体温が高いの知らなかったの？」。その生徒は、口をとがらせながら答えて曰く、「知っています。鶏は鳥類です。鳥類やほ乳類は恒温動物だから、年中体温は変わりません。でも、爬虫類とかは変温動物ですから、外の温度に影響されて体温が変わります」。「よく知ってるね。じゃ何でびっくりしたの？」。「えっ！。・・・えー？・・・」。

彼がそれまでに「学んできた知識」が、「実物をとおして得た認識」とは完全に離反していることを見せつけられた瞬間でした。「学び取ってきた知識」は「実体験」を通さなければとても、認識しているというまでには高められないようです。

（2）保育園児達が「ウサギさんとの触れあい広場」へやってきました。子ども達を案内してきた係員が、「皆さーん、ウサギさんたちで一す。どうですか？」。「可愛いー！」と黄色い返事。入り口を開けてもらって、園児達はこわごわと広場の中へ入ってゆきました。

「さあ皆さん、椅子に座りましょう」。椅子に腰掛けさせられた園児達は、それぞれに膝掛けをかけてもらって、その上にウサギをそっと置いてもらっていました。教えてもらってもいけないはずなのに、どの園児もウサギを何かから守ろうとするように、背中を丸めて顔を下げ、膝の中のウサギを両手で囲い込んでいました。小さい命を愛おしむ姿そのものです。

ウサギが膝から飛び出すハプニングがあちこちで見られ、その度に甲高い絶叫が飛び交います。

ひとしきり遊んだ後に係員が園児達にウサギの印象を聞いていました。「ウサギさんて、どうだった？」「暖かかった。フニャフニャしてた。モコモコしてる。フワフワだった。コトコトしてた。柔らかかった」。ウサギを抱っこする前に全員が言っていた「可愛いー」という抽象的でありふれた表現は、一つも聞かれませんでした。

本物だけが伝えることのできる「真実のメッセージ」は、本物に触れることによって始めて、体感的に受け止めることができるもののようです。

(3) ヒツジの飼育されているコーナーでのできごとでした。小学生、2年生か3年生のようでしたが、十数人と先生らしい人がやってきました。

「さあ。今度はヒツジを観察しましょう!!」。「ハイ」。彼らは持参した「動物図鑑」からのコピーらしきヒツジの写真と、目の前の本物のヒツジとを見比べて、ワイワイガヤガヤ。しばらくして、児童の一人が「先生!このヒツジ間違えてまーす」。「なんだって!」私は思わず振り返ってしまいました。先生はその子の所に行って「どこが?」。「だって、このヒツジにはしっぽがあるもん」。「あら?、ほんとだ。・おかしいわねー」。「エーッ!」。でもさすがは先生でした。飼育担当者にこのことを尋ねていました。

もともと羊毛を採るためのヒツジなので、しっぽを付けたままにしておくと、毛が糞尿で汚れてしまって、羊毛の品質が低下してしまいます。それを避けるために、生後3~4日目でしっぽを切ってしまうのだそうです。ヒツジはしっぽがないままで大きくなるために、教科書や資料集の写真で見かけるヒツジには、しっぽがついていないものが写っていることが多いのだそうです。

知識や常識は疑ってかかること。傲慢なことに、知識や常識は事実さえ否定してしまうことがあるのです。「真実は実物の中にのみ存在する」と知るべきです。

「剥落する学力」とか、「学力の剥離現象」という表現があります。ある大学の興味深い調査結果が報告されました。その大学の1年前の入試問題のうち、ある問題に正解した1年生だけを集めて1年後にその入試問題を再度解かせたところ、正答率はなんと15%ほどだったそうです。つまり、1年間で85%の知識が剥落してしまっていたのです。小学校入学以来、毎日6時間以上、12年間にわたって学び続けた結果がこの実態なのです。

覚えただけの知識や学んだだけの技術は、身に付くどころか、それまでの苦勞に比べて、驚くほど短期間のうちに忘れ去られていくようです。

人の育ち方、生活の仕方が変わることによって、それまで誰にも当然であった体験がなされなくなり、身の回りからもしだいに具体的な伝統物が消えてきています。箆笥(たんす)や囲炉裏(いろり)、納戸(なんど)等が見られなくなって、これらの言葉もあまり聞かなくなりました。伝統としての日本文化を伝えにくくなったと言う人たちが増えてきています。

具体的な物を見たり触ったりすることができにくくなると、私たちは教科書や参考書、マスコミ情報などを鵜呑みにする以外に、知識を手に入れることができなくなります。しかし、鵜呑みにしただけのその知識は、残念なことに真実とは異なっているものなのかも知れませんし、必然性を伴わない知識であれば、じきに剥がれ落ちてしまうことになるかも知れません。

学習の土台は質の高い直接体験をすることにあります。直接体験をすることによって、本物のみが備えている「そのことの実際」を全身で感じ取ることが大切です。なぜなら、「そのことの実際」の中には、本物であるが故に秘めているオーラのごとき「そのことのみが持っている真実」が必ずあるからです。

「どこがおかしい。何か変だ」。私たちは「危機の中にあることに直感的に気づきながらも、そのことを解決することにはあまり積極的ではない」という、二重の危機の中で日常生活を送っています。真実からの確かなメッセージを読み解いて、これから生き抜くための知恵をひねり出すことができれば、この二重の危機から抜け出して生きてゆける新しい自分自身へ進化することができます。

「実際」を通して学ぶこと。本物に直に触れながら課題の解決に取り組む学び方を、学びの基本型と考えて是非大切にしてほしいと思っています。

では、今日はここまでにしておきましょう。

終わります。